

日本未来学会 2015年大会 記録(要旨)

■時 期：2015年11月22日(日) 10:30-17:00

■会 場：日本科学未来館(7階会議室)

■大会テーマ：「人間に未来はあるか」

■プログラム

【セッション1】進化した機械と人間は「共生」できるか 10:30-12:20

○問題意識

2045年、進化した機械が人間を凌駕するかもしれない「特異点」(カーツワイルの言う singularity)は本当に来るのか。機械と人間の「共生の道」を探る。

○発表者

松尾豊(東大准教授)「人工知能の未来～ディープラーニングの先にあるもの」



ディープラーニング+強化学習により、現実世界の森羅万象から特徴量を抽出する(学習する)人工知能の新しい時代が到来。今後は、「認識」→「運動」→「言語」へと展開してゆく。人工知能は何ができるかでなく、何をやらせるか(やらせないか)という「倫理的判断」が重要。人工知能が人間にとってかわるかという安易な問いかけは無意味。人間は「知能」+「生命体」という側面を持つ。(動画)

小林雅一(KDDI 総研リサーチフェロー) 「AIの衝撃 人工知能の現状と課題」



AIがクルマ、家電などの既存産業を活性化していくことになる。センサーデータをAIで処理する自動運転はその典型例。しかし、現実世界の事象は必ずしも正規分布で生起するとは限らない(突然の逆走運転など)。今後はニューロモフィックチップなど脳の仕組みを取り入れたAI技術の導入で、様々なサービスロボットが登場する可能性あり。反面、自律的殺人ロボットなど、軍事転用の畏があることも忘れてはならない。(動画)

○指定討論者

浦野幸(株) Nicogory) 「人と機械が共創する法律サービスに向けて」



法律関係を中心に、人工知能を使って新しい社会を作りたい。「論理」は、ものを見やすくする。自動運転にしても何を実現したいのかを明確にする必要がある(顕在意識化しているのは5%程度にすぎない)。幸せな社会とは、自分が選択した人生に積極的に参加すること。人工知能の登場により、人間の役割は対面サービス業にシフトするのではないか。(動画)

中島新(株)フィックスターズ) 「心の可視化と意識の変革」



シンギュラリティ後の世界のひとつとして、機械と人間の脳の融合の可能性はある。8ミクロン程の「スマートダスト」ができれば、脳内で電子データのやりとりが可能になる。脳への書き込み、脳内情報のダウンロードが考えられる。人間の倫理観とテクノロジーの発展を同期させるべき。奪い合う構造から、与え合う構造へ移行すべきと考える。(動画)

澤田美奈子(株)ヒューマンルネッサンス研究所)

「生活者の視点からみた人と機械が共生する未来」



人間と機械の「いいところ」を引き出し、お互いが強めあえるような関係を引き出したい。「人が不得手なことを機械がやる」あるいは「機械が苦手なことを人がやる」という発想ではなく、人と機械が異なることを認めた上で、「人のすごさ」×「機械のすごさ」の掛け算の発想で、新しい価値を創発することをめざすべき。(画像非公開)

【セッション2】センテナリアン（人生100歳）の時代 13:10-14:50

○問題意識

人間の寿命は延伸し続け、100歳（センテナリアン）時代到来も視野に入ってきた。このような人類未踏の事態は何をもたらすのか、について進化生態医学、社会システム、宗教哲学など多角的な視点から検討する。

○発表者

長谷川敏彦（未来医療研究機構代表理事）

「人類最先端社会 人口遷移から人類の生存転換の未来を見る」



「人生100歳時代」は、もはや夢物語ではない。ただし認知症と難聴を覚悟すること。50歳以降は、医療の出番はない（治らない）。「生涯現役」の発想でなく、「人生の第2トラック」を考えるべき。人生の目的も生き方も死生観もかわってくる。日本は50年後にまったく別の国になる。人口の3分の2が50歳以上となる。当然、価値観もかわる。アジア諸国も高齢化し「大東亜共老圏」の時代に入る。[\(動画\)](#)

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）

「生死のエッジをどう捉えるか～「翁童」論からの提言」



まずは、未来学会の前途を祝して、法螺貝を一吹き。私のスパイラル史観からすると、現代は再び「中世の大危機の時代」に突入している。世界規模でのテロの時代において、再び地縁が崩壊し、無縁社会となりつつある。権力の分散、自然災害の多発、戦乱の時代において、どう生き抜くかが問われている。「老い」と「高齢」は別物。翁と童の逆対応性を指摘したい。[\(動画\)](#)

○指定討論者

古田隆彦（現代社会研究所） 「人生100歳時代 生活者は、社会はどう対応するのか？」



人口波動論から見ると、日本の人口推移は5回の大きな波があった。次の波は、2070年～2080年代にふたたび増加モードに転ずると予測している。ポストモダンではなく、ラストモダンの時代に。様々な人口抑制装置がある。確かに寿命は伸びてきたが、体力は低下してきているのでないか。日本人の生活意識は、旧石器・新石器・弥生・江戸・現代文化の重層構造である。縮小社会ではなく、「濃密・濃縮社会」へと移行してゆく。[\(動画\)](#)

堀池喜一郎（元気シニア実践者） 「元気シニア実践で見えてきたもの」



シニアとして地域活動を実践している。現在74歳で、アクティブシニア（65～75歳）からスマートシニア（75歳以降）へ移りつつある。地域でお金をかせいで納税することができた。ノウハウとして、「ただならぬおじさん」「少額でもお金を稼ぐ」「3ガイ主義（生きがい、やりがい、ナイスガイ）」。福岡県で70歳現役応援センター。尊敬する「百歳人」を目標に、自分も頑張りたい。[\(動画\)](#)

【セッション3】グローバル時代における「日本」と「日本人」 15:00-16:40

○問題意識

人口減少モードに突入した日本において、この国を構成する人々をどう考えるか、文明・文化

史的な視野から、外国人就労と生活をめぐる今日的テーマまでを含めて議論する。

○発表者

久恒啓一（多摩大学副学長） 「日本人の「交流」の歴史 ～ 過去・現在、そして未来」



日本史は、「受容」と「自立」のサイクルを繰り返してきた（対中国、対ヨーロッパ、対アメリカ）。日本、中国、韓国の教科書で、南京事件、従軍慰安婦、東京裁判など扱い方がかなり異なる。グローバル化の時代において中国のプレゼンス増大。「沖縄（琉球）独立論」にリアリティが出てきた。これからは人口の量だけでなく「質」の問題が問われる。（[動画](#)）

大屋雄裕（慶応義塾大学教授） 「国民と市民のあいだ：グローバル化と社会的意思決定」



人口減少が確実な中、文化・言語を共有しない移住者の大量流入とコミュニティが形成されつつある。しかし国内に滞在する非=日本国民に対する生命安全の保護義務は存在する。グローバル市民の受け入れ/外国人地域住民の受け入れ/「流氓」。意思決定主体としての「国民」と配慮の対象としての「市民」のズレが今起きている。（[動画](#)）

○指定討論者

楊炯（行知学園） 「日本留学を新たな高みへ」



小学生時代を沖縄で過ごした。中国人留学生が日本に来るための予備校（行知学園）を起こした。アジアの留学生は専門学校、中国の留学生は大学・大学院をめざす。しかし卒業後、日本国内に残留する比率は少ない。東大が「すべりどめ」になっている（アメリカの大学に行ってしまう）。留学生が日本の地域にもたらす経済効果は大きい。全世界で中国人留学生は40万人、市場規模は4.7兆円と推測される。（[動画](#)）

原英史（政策工房） 「外国人人材の活躍を阻む壁」



元通産官僚で行政改革を推進。日本の外国人受け入れはねじれている。欧米のトップエリート、単純労働者は「技能実習」という建前で受け入れ（劣悪な労働環境）。クールジャパン人材（美容、アニメ、ファッション、デザインなど）は、留学・資格試験はOKだが、就職は禁止（食は例外扱いの動きも）。日本で活躍できる外国人を推進すべきだが、日本の「圧力団体」は未来のことを考えていない。近日、「外国人雇用協議会」を立ち上げる。（[動画](#)）

橋川幸夫（デジタルメディア研究所） 「日本の運動会をアジアへ」



アジアは基本的に多民族国家。アジア教育友好協会でラオスの山奥に学校を作り、心の底から感謝された。日本財団と企業からの寄付により10年間で191校を作った。学校を作るだけでなく運営にも関与している（卒業生を教員にする）。日本の「運動会」は、世界に誇る素晴らしいコンテンツ。2020年の五輪にあわせ、アジアの学校生徒による運動会を提唱する。（[動画](#)）

【総括】公文俊平会長



ここ1、2年とんでもない技術革新が起きている（人工血液、マイホーム発電、工場型農業など）。今年80歳になるが、100歳まで生きていけそうな気持ちになった。（[動画](#)）